

II 遺 構

1. 遺跡の概観

平城京左京三条二坊三坪の中央部やや東南にあたる今回の調査地は、平城京廃絶以降水田化し今日に至ったと考えられる地区で、現状は平坦な水田であり、地表面標高は60.2mを計る(ただし、北寄り3分の1に厚さ50cmの盛土がある)。地形的には、奈良盆地北の奈良山から平城宮の南にのびる丘陵のきわめてなだらかな東南傾斜面上に位置し、東方を平城京堀河の一つにあたる菰川こもが南流している(fig. 2)。

調査地の基本的な層位は、地表から①耕土(約20cm)、②床土(約10cm)、③遺物を包含する暗褐色粘質土(10cm前後)の順で、その下で④暗灰褐色粘土ないし黄褐色粘土の地山面となる。なお、地山の一部には遺物を含まない奈良時代以前の黄灰色砂層の旧河川がみられた。遺構の検出は地表下30~50cmの地山面において行った。柱掘形の深さなどの遺存状況からみて、一部後世の削平を受けているが、遺構の保存状態は極めて良好であった。

ところで、調査地の周辺は近年近鉄新大宮駅や国道368号線(大宮通)・国道24号線バイパス沿いを中心として急激に市街地化の波がおし寄せており、今や平城廃都以降水田として伝えられてきた土地も次第に消えつつある。一方、こうした開発に相応じてこの地域の発掘調査事例も数を増しており、左京三条二坊は平城京内においても最も多くの発掘調査が行われた地区となっている。なかでも調査地東隣りの左京三条二坊六坪の特別史跡宮跡庭園は、見事な奈良時代の園池として著名である(fig. 5)。これまでの左京三条二坊の発掘調査の成果をまとめるとtab. 2・fig. 6の如くである。

1965年、奈良国立文化財研究所が平城宮東南隅において実施した平城宮跡第32次調査によって、二条大路と東一坊大路の交点とともに左京三条二坊一坪の北西端の様相が明らかとなった。1973・4年には奈良市庁舎建設の事前調査として十・十五坪を広範囲に調査(第83・86次)した。この調査では、八世紀末まで十五坪全体を占める邸宅を確認、東西に並ぶ



fig. 4 平城京(復原)と調査地



fig. 5 宮跡庭園の遺構

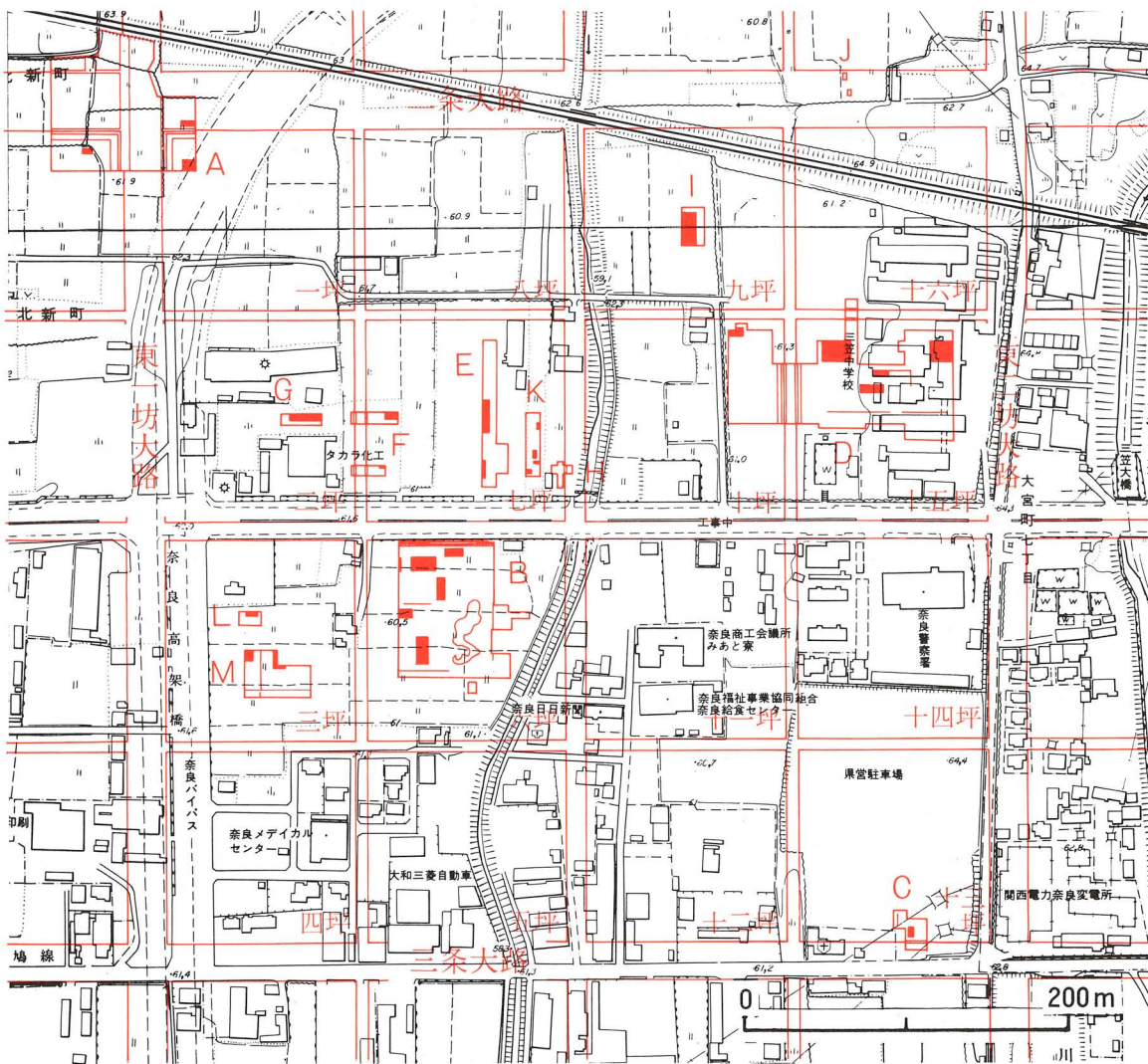


fig. 6 平城京左京三条二坊の発掘調査図

	年 度	調査回数	条坊位置	面 積	奈良時代の主要遺構	文 献
A	1965	第32次	一坪	6000㎡	坪西北隅の築地・溝・建物	『奈良国立文化財研究所年報1966』1966年
B	1973・4	83・86	十五・十坪	6200	一坪を占める掘立柱建物群・坪内区画堀・坪境小路	奈文研『平城京左京三条二坊』1975
C	1974	奈良県	十三坪	300	三条大路北側溝・建物・堀	奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条二坊十三坪』1975
D	1975	96	六坪	4400	坪心の園池と掘立柱建物群・坪内区画堀	奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976
	1977	109	六坪	1100	園池北の掘立柱建物群	奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978
	1979	121	六坪	500	園池への導水路・掘立柱建物	奈良市教育委員会『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1980
E	1977	103-1	七坪	900	掘立柱建物群・旧河川	奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978
F	1978	112-3	七坪	301	坪境小路・掘立柱建物群	奈文研『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1979
G	1979	118-15	二坪	150	掘立柱建物	奈文研『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1980
H	1979	118-23	七坪	160	東二坊坊間路西側溝	同上
I	1979	奈良市	九坪	360	坪中心の大型掘立柱建物	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和54年度）』1980
J	1980	123-37	二条大路	18	二条大路路面か	
K	1982	141-35	七坪	342	小規模建物・六坪園池への導水路	奈文研『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983
L	1983	奈良市	三坪	120	掘立柱建物	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和58年度）』1984
M	1983	151-32	三坪	940	坪内区画堀・掘立柱建物群	本報告

tab. 2 平城京左京三条二坊の発掘成果一覧

2棟の主屋建物とそれを囲む建物群・坪内を区画する堀、そして十・十五坪間の坪境小路などを検出した。1974年には奈良県立橿原考古学研究所が十三坪南辺を調査し、三条大路北側溝と坪内の建物を確認した。つづく1975年には奈良郵便局建設予定地として六坪の調査が行われ(第96次調査)、坪の中心に奈良時代の園池を検出、それをとり囲む建物群や堀が坪内に計画的に配置されていることが明らかとなった。特別史跡に指定して保存された宮跡庭園である(fig. 5)。この遺跡は、1町(以上)規模をもつ遺構や出土遺物から、平城宮と密接に関連した離宮的性格の施設ないし親王宮などかと考えられる。なお1977・79年には宮跡庭園の補足調査(第109・121次)が行われた。1977年には七坪のほぼ中央に南北トレンチを入れ(第103-1次調査)、建物群を検出した。翌1978年の第112-3次調査では二・七坪間の坪境小路等、1979年の第118-15次調査では二坪の建物をそれぞれ確認した。同年の奈良市による九坪の調査では、坪の中心に大規模な掘立柱建物が検出され、九坪が坪全体を占める宅地であったことが判明している。つづく1980年には十六坪北の小規模な調査(第123-37次)で二条大路の路面かと思われる面を確認、1982年の七坪の調査(第141-35次)では小規模な掘立柱建物群と六坪の園池への導水路を検出した。その後1983年に入って、奈良市は今回の調査地に北接する三坪内の水田を調査し、掘立柱建物等を検出している。

今回の調査(第151-32次)では、三坪の中央やや南寄りの地を940㎡にわたり調査した。その結果、奈良時代前半に坪の東西2等分線をわたる建物が存在した時期、奈良時代中頃には南北堀・東西堀に区画されつつ掘立柱建物群を配置した時期のあることが判明した。両時期とも、三坪は東の六坪の宮跡庭園とは異なる敷地であり、すくなくとも1坪を占める宅地であったと推定できるのである。

以上みてきたように平城京左京三条二坊においては、一町規模以上を占める宅地として六坪(宮跡庭園)・九坪・十五坪に加えて今回の三坪を数えることができる。また七坪もある程度(1,700㎡)調査が進んでいるが、坪内を細かく宅地割するような施設はまだ見つからない。平城京の発掘調査で知られた宅地割の遺構をみても、一町規模の宅地の例は限られており(tab. 4)これらの宅地は上級の官人に班給されたものと推定できる。このことは、平城宮の東南に接する立地とあわせて、左京三条二坊が平城京内でも一等地の高級邸宅街であったことを示している。しかも、今回調査の三坪は東一坊大路に面し、三条条間路にも面するという好地を占めており、京内宅地の一例として注目されるのである。



fig. 7 左京三条二坊十五坪の邸宅(復原)

2. 遺 構 (fig. 8 ~ 12, PL. 3 ~ 9)

検出した主要な遺構は奈良時代に属する掘立柱建物 8 棟、掘立柱塀 4 条、井戸 2 基、土壇 4 基と、中世～近世の土壇 5 基などである。各遺構には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部で行っている平城京左京の調査基準に従い一連の通し番号を付した。また遺構の種類を表わすため、遺構番号の前に S B - 建物、S A - 塀、S E - 井戸、S K - 土壇、S X - 特殊遺構等の記号をつけた。以下、遺構の種類毎、遺構番号順に解説する。

掘立柱建物

S B 2950 (PL. 5) 調査区中央北辺に位置する掘立柱南北棟建物。一辺 1.5 m、深さ 0.8 ~ 1.0 m 程の大規模な矩形の柱掘形をもつ。桁行 4 間以上 (3.0 m 等間)、梁間 3 間 (2.4 m 等間) で、廂のない建物。柱はすべて抜き取られているが、西南隅の柱抜き穴には柵をもつ長さ 40 × 幅 15 × 厚さ 5 cm の板材 (礎板か) が残存していた。なお抜き穴の方向は、西の側柱列では建物の外側に向かっているが、南妻柱列では一定していない。この S B 2950 の西側柱筋と三坪を二等分する南北塀 S A 2970 との間は 7.1 m (0.295 ~ 0.296 m の天平尺で 24 尺) で、S B 2950 の梁間総長と一致する。また西方の東西棟建物 S B 2990 身舎と柱筋をそろえている。なお西側柱の部分で、S B 2950 の柱掘形は S B 2980・S B 2998 の柱掘形を切っており、東南隅柱掘形は中世～近世の土壇 S K 2955 によって切られている。

S B 2975 調査区中央のやや西よりにある、桁行 3 間・梁間 2 間の小規模な掘立柱南北棟建物。柱間は桁行 1.8 m (6 尺)・梁間 1.5 m (5 尺) 等間。北の妻柱列と西側柱の一つの柱掘形の上に柱痕跡が確認できた。この建物は北の S B 2978 と棟通りをそろえている。

S B 2978 調査区北辺中央にある南北棟掘立柱建物。梁間は 2 間、桁行は推定 3 間で柱間は梁間が 2.25 m (7.5 尺) 等間、桁行が 2.1 m (7 尺) 等間。柱掘形の規模は一辺 0.5 m 程で小さく浅いため、桁行では妻部分の柱掘形しか確認できていない。南の妻柱の位置で S B 2980 と S A 2970 の柱掘形を切っている。また南の S B 2975 と棟通りをそろえている。

S B 2980 (PL. 6) 調査区北辺中央にある大規模な東西棟掘立柱建物。桁行 4 間以上・梁間 2 間以上で、南廂をもつ。柱間は桁行が 3.0 m (10 尺) 等間、梁間は 2.7 m (9 尺) 等間。柱掘形は 1 m × 1.2 m 程の大きさで、柱はすべて抜き取られている。この柱掘形は西妻で S K 2996 を切っているが、南の側柱・入側柱の部分で S B 2950・S A 2970・S B 2978 の柱掘形によって切られている。なおこの建物は三坪の東西 2 等分線をまたいで建っている。

S B 2990 (PL. 6) 調査区西北隅にある規模の大きな東西棟の掘立柱建物。梁間 2 間以上、桁行 2 間以上で、南廂をもっている。柱間は梁間が身舎部分 3.0 m (10 尺) 等間、廂の出が 2.4 m (8 尺) で、桁行は 2.7 m (9 尺)。身舎東南隅の柱以外の身舎部分すべての柱穴 (柱穴 ㊦ ㊧ ㊨ (fig. 8)) に径 30 cm 程の断面八角形の柱根が残っていた (fig. 9、III - 4 参照)。特に東妻の棟通りの柱 (柱穴 ㊦) は礎板として下段に南北方向、上段に東西方向の板材を重ねている。身舎の柱は東方の S B 2950 と柱筋をそろえている。また、東妻柱列と S A 2970 との間は 5.

9m(20尺)を計る。

S B 2992 調査区西部中央にある小規模な南北棟掘立柱建物。梁間は2間だが、桁行は柱掘形が浅いため南側2間分しか確認できなかった。柱間は梁間が2.1m(7尺)等間、桁行が2.4m(8尺)等間。東側柱はS A 2970の柱掘形を切っており、それより新しい。また西南隅の柱掘形からは奈良時代後半の須恵器杯B蓋が出土し、同時にS B 2990の柱抜取穴から出土した須恵器壺の破片の一部も出土している。

S B 2995 調査区東端北辺の建物で、東西方向の3個の柱掘形しか検出できなかったが、柱掘形の規模からみて西廂をもつ南北棟建物かと思われる。南妻の柱間は3.0m(10尺)等間で、身舎の柱にのみ柱痕跡がみられた。建物の方位は北で若干東にふれている。

S B 2998 調査区北辺中央にある掘立柱建物。東西方向1間以上・南北方向2間以上の建物の、西南隅の部分を検出したにとどまる。柱間は東西方向が2.4m(8尺)、南北方向が2.7m(9尺)。このS B 2998の柱掘形はS B 2980およびS B 2950の柱掘形によって切られており、今回の調査区では最も古い時期の掘立柱建物である。

掘立柱堀

S A 2960(PL.17) 調査区南寄りにある掘立柱東西堀で、18間分を検出した。掘形は60cm×80cm前後で、径20cm前後の柱痕跡のみられるものが多い。柱間には2.25m(7.5尺)と2.1m(7尺)の両者がみられる。東端から7番目の掘形(柱穴④)には柱根と礎板、14番目の掘

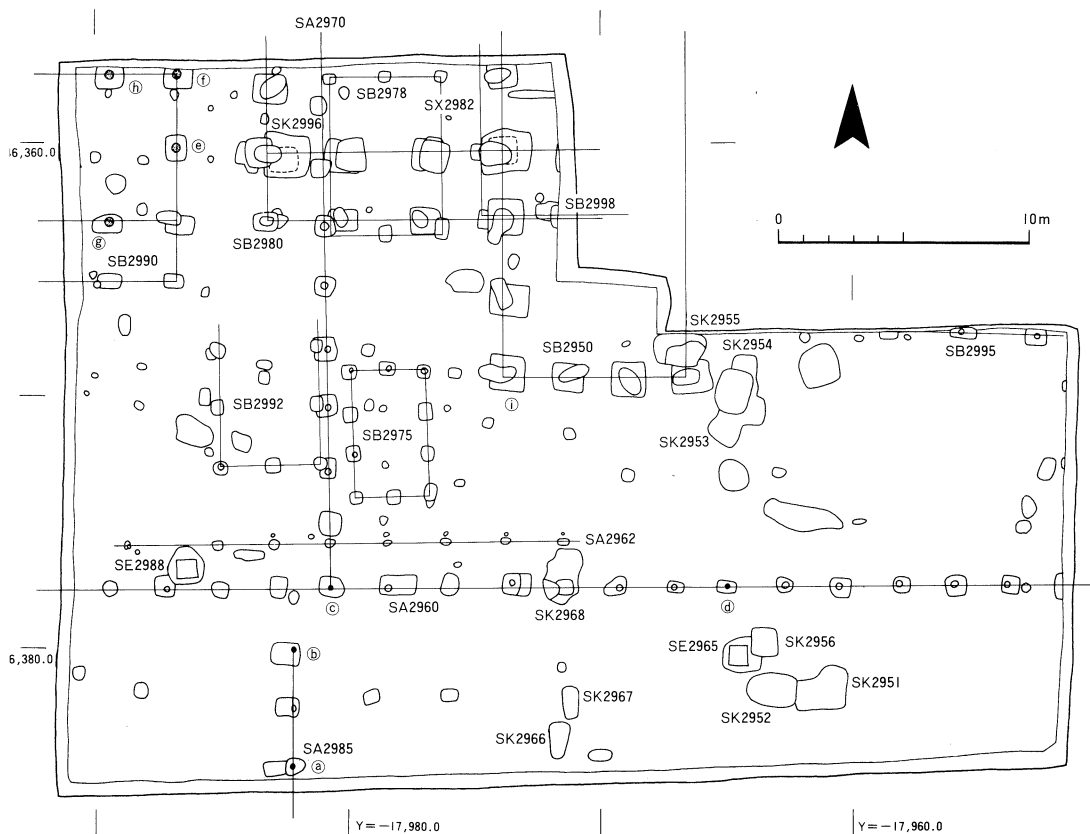


fig. 8 遺構配置図

形(柱穴㊟)には柱根が残っていた。後者の柱掘形は南北塀 S A 2970 と接合する位置である。また、東端から 4 番目の柱掘形からは平城宮 II 期の軒丸瓦 6225 型式が出土した。S A 2960 の柱筋は三坪の南北二等分線から南 26.9m (88 尺) の位置、三坪を南北に四等分する南ラインの北 4.5m (15 尺) の位置にある。なおこの柱掘形は、調査区西辺で井戸 S E 2988 の掘形、調査区中央では土壌 S K 2968 によって切られている。

S A 2962 S A 2960 から北 1.8m (6 尺) の位置で平行に走る掘立柱東西塀。6 間分を検出したが、さらに東西に延びる可能性がある。柱掘形は 30cm × 40cm 程の小規模な楕円形で、すぐ北に接して控え柱の柱穴とみられる円形の小穴(径 15cm)をとまなっている。

S A 2970(PL. 7) 調査区中央西寄りで東西塀 S A 2960 の北に直角にとりつく掘立柱南北塀。柱間 2.4m (8 尺) 等間で 8 間分を検出した。掘形は 80cm × 90cm 程で、埋土は S A 2960・S A 2985 に似る。この塀の位置は三坪の敷地のちょうど東西 2 等分線上にのっている。なお、北で行われた奈良市の発掘調査で同線延長上にある柱掘形が確認されているが、三坪中心点から北 40 尺の位置でとまっており、それより北には延びない。

S A 2985(PL. 7) S A 2970 よりも西に 1.5m (5 尺) 寄った位置で、東西塀 S A 2960 よりも南にある掘立柱南北塀。柱間は 2.4m (8 尺) 等間で 2 間分を検出した。調査終了直前に調査区の南で建設工事用の掘り下げを行っている地点で北端から 6 番めの柱掘形を確認したので、S A 2985 はさらに南に延びている。北端の柱と東西塀 S A 2960 との間 2.4m (8 尺) は開口としている。掘形の規模・埋土は S A 2970・S A 2960 と似ており、北と南の掘形には径約 20cm の柱根と小さな礎板が残る(Ⅲ-4 参照)。

井戸

S E 2965(PL. 8、fig. 11) 調査区東南部で検出した隅柱横棧縦板式の井戸。掘形は東西 1.5m・南北 1.3m の隅丸方形で、深さは中央部で遺構検出面から約 1.7m。井戸枠は東西 70cm

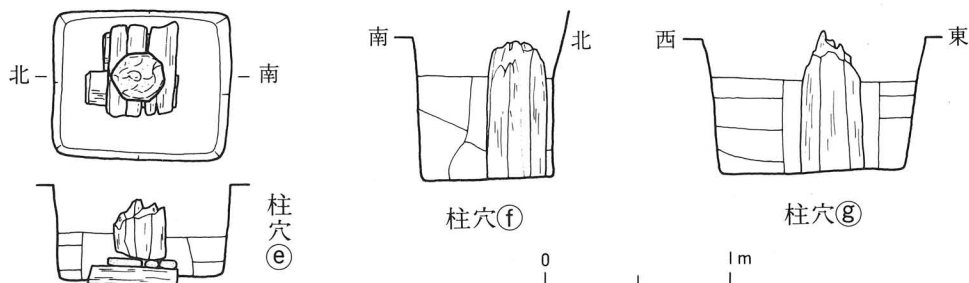


fig. 9 S B 2990 柱根出土状況実測図

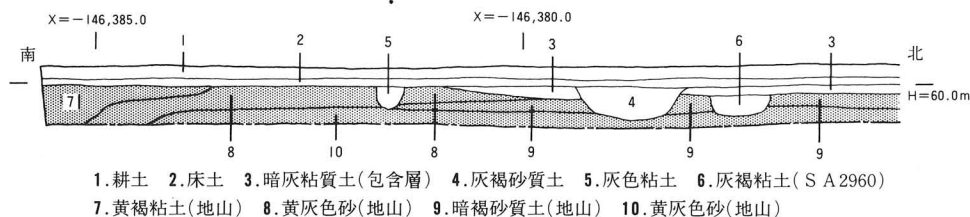


fig. 10 調査区西壁南部土層図

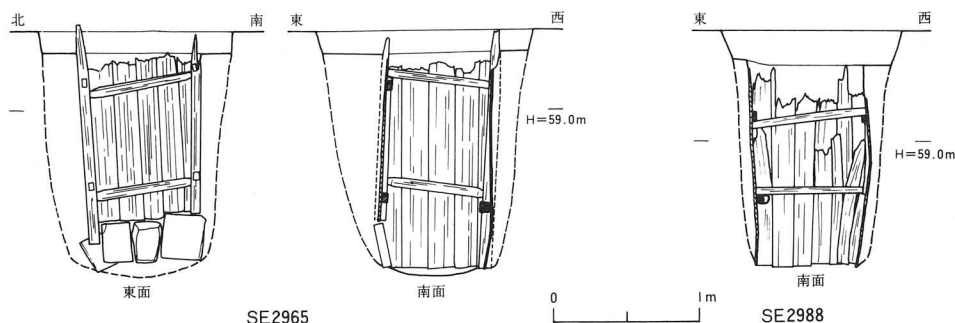


fig. 11 井戸 S E 2965・S E 2988 立面実測図

・南北75cmで、四隅に角柱をたて、柵をもった横棧を渡して四辺の縦板を支える構造をもつ。東面の隅柱・縦板だけは、下段に完形の埴3枚と方形の石1個を立て並べた上に据えている。縦板は下端から1.4m分、横棧は2段残存する。埴内埋土出土遺物には奈良時代末期の平城宮Ⅴ(780年頃)の土器類や完形の平瓦、曲物底板などがある。

S E 2988(PL. 8、fig.11) 調査区西南部で検出した井戸。掘形は東西1.2m・南北1.5mの不整長円形で、深さは中央で1.5mまで確認した。この掘形はS A 2960の柱掘形を切っている。井戸枠は東西80cm・南北70cmの矩形で、縦板を内側から横棧によって支える構造をとる。縦板は下端から1.4m分、横棧は2段が残存する。埋土から奈良時代後半の平城宮Ⅲ(750年頃)の土器と、鈕の付いた円形の木蓋などが出土した。

土壌

S K 2951～2955 調査区東半に散在する不整形の土壌群。互いに切り合うものもあるが、いずれも中世(室町時代頃)の土師器小皿や瓦質土器、陶器片を少量出土している。

S K 2968 調査区中央の南部にある不整形の土壌。
S A 2960の柱掘形を切っている。少量出土した土器は奈良時代後半(平城宮Ⅲ以降)のもの。またS K 2966・2967からも奈良時代の土器細片が出土している。

S K 2996 調査区北辺西部にある隅丸方形の土壌。一辺約1.8mで、深さは遺構検出面から約1.6m。遺物はなく、井戸の掘形として掘られ、そのまま埋め戻されたものか。S B 2980の柱掘形によって切られており、調査区内では最も古い時期の遺構である。

その他

S X 2982(PL.10、fig.12) 調査区北辺で検出した径18cmの円形の小土壌で、中に和同開珎2枚を納めた小形の須恵器壺を埋置したもの。おそらく地鎮のための施設であろう。壺の年代は奈良時代後半の平城宮Ⅲ(750年頃)に相当する。

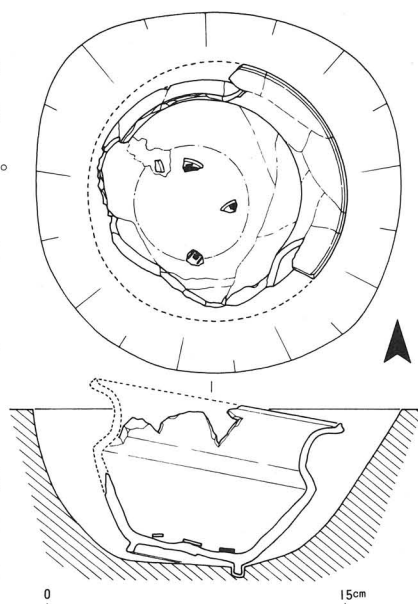


fig. 12 S X 2982 実測図